戦争を知らない世代へ ㊳ 青森編

# 陸奥湾を染めた炎

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ㊳
陸奥湾を染めた炎

昭和53年6月13日　初版第1刷発行

編者©　創価学会青年部反戦出版委員会
発行者　栗生一郎
発行所　株式会社　第三文明社
郵便番号 101 東京都千代田区猿楽町2-5-4
振替　東京5-117823　電話03 (294) 8731(代)
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　株式会社　星共社　1100

落丁・乱丁本はお取り換え致します　0036—7038—4438

# 発刊の辞

青函連絡船の破壊は、本州と北海道を結ぶ大動脈の切断であった。それは、二週間後の昭和二十年七月二十八日に決行された青森壊滅作戦の前哨戦ともいえた。本州最北に位置する青森は、北海道への基地としても格好の地と判断されたに違いない。B29百二十機による集中砲火は、一夜にして死者七百三十七人、市街地の全面積のほぼ九割を焼失したのである。時は流れ三十三星霜――。焼けただれた母親の死体にとりすがって泣き叫ぶ子供の声も、手足を切断され水を求めるうめき声も、焼夷弾に直撃され炎に包まれながらの絶叫も、硝煙にかき消されたかのようにいまはない。涙の乾かぬ人々の復興への苦悩と労作業もいまでは語る人もない。近代的ビルが立ち並び、連絡船が行きかう青森、りんごと八甲田山に象徴される青森にいまや戦争の傷跡を見つけることはむずかしい。しかし、あの忌わしい戦争は遠い過去のものとして、忘却のかなたに去ったのであろうか。

当時、生れた子どももはや三十三歳を数えようとしている。戦争を知らない世代は人口の過半

数を越し、二十一世紀の日本を背負っていくことになろう。しかし、これらの人々が、我が郷土に起こった忌わしい戦争の悲惨さを知らずして、この日本を背負っていったとするならば、再び同じ轍を踏まないと誰が断言できようか。

近代戦争の恐ろしさは、核兵器の登場によっていまや人類の生存さえ奪おうとしている。もはや、戦争の二字からは人類の滅亡という解答以外はじき出せない。この事実を、どれだけの人々が認識しているであろうか。こうしている現在も核兵器は着々と製造されている。同時に生あるものの頭上に、死の影がひたひたと迫っているのも事実である。人間が人間を大量に虐殺して、公然とはばからない世の中は、もはや人間社会の姿ではなく、悪魔の仕業であるということを、すべての人々が知らねばならない。

私たち創価学会青年部は、仏法信仰者として、生命の尊厳を貫く立ち場から、これまでも数々の平和運動を展開してきた。「戦争を知らない世代へ」シリーズもその一環である。本書、『陸奥湾を染めた炎』も、二度と戦争を起こしてはならない、との悲願を込め、創価学会青森県青年部の手で発刊するはこびとなった。炎と硝煙の中をかいくぐって生死の淵から必死に生き伸びた体験者のなまの声を聞くにつけ、戦争への怒りが生命の奥底から込み上げてくるのである。

本書の取材編集にたずさわったメンバーの年齢は二十代で、いわゆる戦争を知らない世代である。しかし、取材編集が進むにつれ、日増しにメンバーの目は輝き、その行動は激しくかりたて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

られていった。本書が、メンバーの心に鮮烈に焼きついた平和への願いをさらに広く、また後世へと引き継いでいく橋頭堡となってくれれば望外の喜びである。

最後に、本書の趣旨を良く理解し、貴重なる体験を寄せられた方々、さらには、寄稿文をご執筆くださった皆様に対し、深く感謝申し上げる次第である。

昭和五十三年五月三日

創価学会青年部
青森県青年部長　佐藤邦彦

# 目次

発刊の辞

## 第一章　地獄絵図からの脱出

夜空を焦がす焼夷弾……住吉ハル　10
生命をつないだ一丁のハサミ……小原ミヨシ　13
赤く染まる月……辻　なよ　19
恐怖に震えた一夜……工藤彰三　23
猛火の中で見たもの……越浪啓充　29
幼い脳裏に焼きついた悲劇……成田睦男　35
苦しかった疎開生活……豊巻れき　40
悲惨な悪夢の空襲……一戸ハル　46

## 第二章　吹き上げる熱風の中で

川の中で過ごした一夜……高梨みつる　54

泣き叫ぶ姿のまま黒焦げに……鈴木キミ　60
私が死んだら……桜庭ひさ　66
不運だった私の一生……五十嵐きの　69
血で染まった死体の群れ……加藤さつみ　73
息を殺して耐え忍ぶ……北畠きく　77
炎の海を生きのびて……福士ツェ　82
焼夷弾の雨に焼かれて……佐々木美津　87
灰色の青春……長内律子　91
消火作業に我を忘れて……柴田国雄　94
十五年目の終止符……吉崎富太郎　100
警備隊員として生きた日々……高松賢一　104

## 第三章　閃光・叫喚・炎上の巷

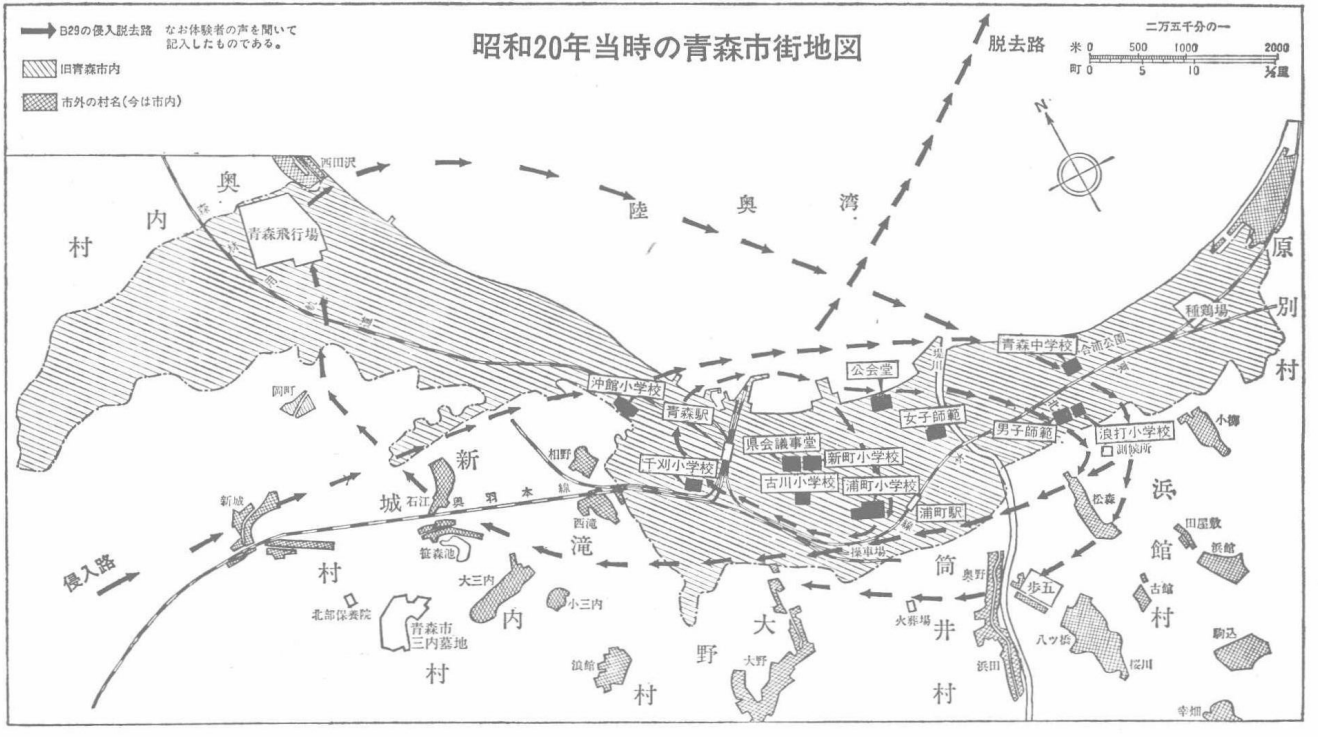
全身火傷の後遺症……斎藤正一　110
まんどろの白夜……中川美代　118

帰らぬ親の姿に我は泣く……稲見ひさ 123
空襲の爪痕……相馬きぬ 127
炎で染めた堤川……櫛引重次郎 134
山積みされた死体を前に……匿名 140
子供心に悲しかった終戦……高坂博文 144
我が子を抱きしめて……古川チヨ 149
空襲の闇に消えた祖父……工藤正城 154
わずか一晩の出来事……斎藤省吾 159
沈没寸前の連絡船……長谷川幸一 163
焼跡の一本の立札……柳谷末太郎 168
遂に帰らなかった姉……松橋正三郎 175
戦禍に奪われた家族……高松ふよ 180
繰り返される戦争への恐怖……久米田みよ 185
生と死の瞬間をさまよう……上林ちや 188
一個の爆弾でふっ飛んだ我が家……川村由太郎 193

火の粉の中を愛馬とともに……成田ふみ 196
夜空の星も敵機に見えた……有馬秀雄 200
ポッカリと穴のあいた街……高松ちせ 205
防空壕の中で焼かれた妹たち……尾崎泰一 210
焼けずに残った防空壕……高坂その 215
焼けてしまった新築の我が家……古川マサ 221
誰にもいえない終戦生活……高森ひさ 225

## 寄稿文

軍歌をたのしそうに歌う若人へ……石崎宜雄 230
空襲の青森……肴倉弥八 233
雪中耐寒行軍強行の背景……小笠原孤酒 238
あとがき




此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 第一章　地獄絵図からの脱出

# 夜空を焦がす焼夷弾

住吉ハル（54歳）
現在・主婦
当時・主婦

昭和二十年七月二十八日の夜半にかけて、B29約百二十機による青森空襲がありました。後日の発表によると、この時の被害は死者七百三十七人、不明八人、重軽傷二百八十二人、焼失戸数一万四千九百六十四戸、被災者七万百六十六人にものぼったとありました。

私の家は、現在の市役所のそばにありましたが、現在の住居とほとんど変わっていません。青森市が空襲されるということは、ビラがたびたびまかれたため知ってはいましたが、避難場所が近くの中央高校の校庭であったせいか、いつでも逃げられるという安心感が常にありました。しかし、いざ空襲となるや家族はバラバラとなり、私も逃げるのが少し遅れてしまい、校庭の防空壕に入ることもできず、かたわらで顔だけを隠すのがやっとのありさまでした。家族が散り散りバラバラとなってしまい、全く消息がつかめなくなってしまいました。そして、まんじりともせず赤く焦げた夜空を見上げて過ごしたものでした。夜も白々と明けてきたので、とりあえず荒川にあった実家に避難することにしました。田んぼ伝いに歩き出し、ふとうしろを振り返った時、

昭和20年当時の買い出し風景

くすぶり続け、焼野原と化した町並みの彼方に海が見えたのには、非常に驚きました。その時、雨のように降りそそいだ焼夷弾が花火のように美しかった昨夜の光景が脳裏をかすめて、一瞬にして何もかも灰にしてしまった戦争をうらめしく思いました。

やっとの思いで実家にたどり着いた時、義弟が腰に傷を負った以外、全員無事だと知らせを受けて、思わず胸をなでおろしたものでした。それからは、家族全員、実家にやっかいになることにし、そこで義弟の腰の傷を治療することにしました。空襲後、小学校に救護施設ができたので、毎日義弟を連れて通いました。そこには、空襲で負傷した人がたくさんおり、なかには、治療のかいもなくこの世を去っていく人が何人となくいました。その人たちを見るたびに

戦争のむごさを痛感したものです。

二、三カ月間、荒川の実家にやっかいになったあと、夫が焼跡に六畳一間のバラック小屋を建てました。私の戦争は、この時からまた始まったのです。その戦争というのは、六畳一間に寝起きする八人の家族の生命を維持していくという生活苦に対する戦いです。私は、義妹と二人で、毎日買い出しにでかけ、遠くは五所川原や八戸まで足をのばしました。一日に食べる量も相当なものです。米などめったに手に入れることのできない時代ですので、毎日芋ばかりの日が続きました。その日の食糧を確保するとほっとするものの、明日食べるものが何もなく、食べながら明日の食べもののことを心配しなければならないといった毎日が続きました。戦争の最中にありながら、戦争がどうなっているかなどと考えるゆとりを全く失っていた状態でした。ただ、敗戦の知らせをラジオで聞いた時は、何か身体の力が抜け、悲しい思いが込みあげてきたことを覚えています。

いま思えば、破壊、殺りく、食糧難と、どれ一つとっても、苦しいことばかりの戦争を、なぜ人間はやらなければならないのか、非常に腹立たしくもあり、逆に平和の尊さを痛感しないわけにはおられません。戦争は二度と繰り返してはならない、二度と繰り返されてはならないと訴えずにおられません。

# 生命をつないだ一丁のハサミ

小原　ミヨシ（78歳）
現在・無職
当時・理髪業

昭和二十年七月二十八日、私が四十八歳の時でした。当時、私の家は新町の松木屋デパートの向い側で、理髪店を営んでおりましたが、食糧不足と連日の空襲警報で夫からもすすめられ、私は子供二人を連れて疎開を考えていた時でした。

七月二十日前後でした。外が何やら騒がしいのです。何事かと思い外に出てみると、なんと何十機ものグラマン機がやってきており、ポッポッとした小さな点がやがて大きくなり、爆弾が降ってきます。誰かが、「ここにいると危険だぞ！」と叫んでいたような気がします。私は、どこにも逃げるあてがなかったものですから、ただうろうろとするばかりでした。その時、町内の人がまわってきてくれて、「うちの家内が細越の寺にいるからそこを頼りに行きなさい。とにかく危いから早く逃げろ」といってきてくれました。夫は家を留守にすると配給物資がもらえないため、ひとり家を守ることになり、とにかく私と子供二人だけでもと防空頭巾で頭をおおい、持って行けるだけの荷物を背負って家を飛び出しました。

しかし、細越といっても私は一度も行ったことのない、見知らぬ土地だったのです。夜の九時過ぎでしたので、あたりは暗くて道さえわかりません。心細く不安でしたが、まわりには私だけでなくほかの人たちもいくらか歩いていましたので、その人たちといっしょに、くねくねと曲がりくねった道を山へ向かって歩いて行きました。途中は、広い田んぼの連続です。どこも逃げ場はありませんでした。

空にはB29の落とした焼夷弾が、ドーンという音とともにパチパチと傘をひらいたような形となり、現われては消えてゆきます。まるで線香花火を大きくしたような火花を散らしながら次々と、それは夜目にもはっきりと、明るく浮かび上がります。私たちはそれが空に現われるたびに、たとえそれがはるかに遠くても、逃げまわり、当たらないように低くかがんで歩きました。グラマン機がくるたびに夢中で道端に伏せました。そうして会う人に道を聞きながら、野原や林をぬけて、ただ黙々と闇の中を歩き続けました。

大野からどこをどう歩いたのかは全く覚えていませんが、とにかく人家の燈をめざしながら、やっとのことで細越に着いた時には、とうに夜中を過ぎ、明け方近くになろうとしている頃だったと思います。

身も心も疲れていたのでしたが、そんなことを考える余裕もありませんでした。その村の寺にたどり着くと、本堂には私たち家族三人のほかにも、たくさんの避難してきた人々がきていて、



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com